

of the Student の全訳が、京都大学石井助教授らの盡力をもとに、この会議のメンバー全員の協力による全訳として完成し、文光堂から公刊されたのもこの年の5月である。第5章コーン、G.P. の「急性精神病・抑うつ状態・発揚状態」を永田忠夫との共訳で私も分担した。2年にまたがる共同作業の成果をふまえ、これら研究会議の今後の課題は、いわゆるstudent apathyの問題と、グループ・アプローチとに集約され、それらをめぐっての私ども自身の実践が、昨年にひきつづいて51年度もまた企画されている。

(6) 精神障害者への接近は、今年もまた、現象学的志向によるロールシャツハ研究を、「現象学研究会」の中で数名の仲間と共に、症例研究を中心として積み重ねてきた。従来の蓄積された資料とあわせ1本にまとめることを期しているが、今日まだまとめの段階に到っていない。しかしながらこれらの検討をとおして、「心理学における人間接近への道はいかにあるべきか」、冒頭にかかげた主題に沿った、私自身の現段階における中核の課題を、さらに問いつづけていきたいと考える。

研究経過報告 久世敏雄

「児童の心身発達の追跡研究」および「中学生・高校生の社会的態度に関する研究」は、継続中である。過去1年間の成果は、つぎのとおりである。

1. 「児童の発達特徴」「心理的離乳」
広岡亮蔵編『授業研究大事典』 明治図書
昭和50年4月
2. 「青年期へのアプローチの方法」
井上健治ら編『有斐閣大学双書 青年心理学』
有斐閣 昭和50年7月

3. 「青年期の自己開放性に関する一検討
— 対象の類型の観点から —」
教育心理学科紀要 22巻 昭和50年9月
4. 「中学生・高校生の社会的態度に関する研究(II)」
(速水氏と共同)
教育心理学科紀要 22巻 昭和50年9月
5. 「価値多様化時代と思春期」
教育と医学 24巻3号 昭和51年3月
6. 「青年心理研究の方法論」学位論文
昭和51年3月

一年間の研究経過 村上隆

ここでは、私が本学に就職した昨年4月から、本紀要締切り(6月末)までの経過について述べる。本学に応募した際に提出した“研究経過と研究計画”には、主たる関心領域として3つあげたが、それぞれに則して、簡単に記することとする。

(1) 心理学における測定の論理

一次元の心理的連続体における、差の判断の大小関係から、尺度値を求める、いわゆるdifference scalingに関する考察を続けている。Kruskal流のnonmetricな手続きによる解法のプログラムを作成し、(2)において利用したが、もしデータが、ある公理を満足していれば、この解は連立一次不等式の解集合となることが明きらかである。故に、この解集合全体を求めることにより、解の一定の範囲での一意性について明きらかにできると期待される。これは本年度の課題である。

(2) 心理物理的尺度構成におけるそれらの論理の検討

上記difference scaling を適用して、対比効果を含む明度関数の形を決定する問題を取り扱った。ある種の原理的考察から、可能な関数型を幾つか導出し、あてはめを行なった。これによれば、

$$f(s, b) = p s^n + C \quad (s \geq b)$$

$$f(s, b) = p s^n + q |s - b|^n + C \quad (s < b)$$

なる関数が最もよくあてはまる。ただし、 s, b はそれぞれテスト刺激と、背景刺激の比反射率である。現在、より詳細な検討を進めており、近く論文として発表する予定である。なお、これらの内容の概略は、昨年及び本年の日本心理学会大会抄録に掲載されている。

(3) 多次元解析的手法

主力を注ぐはずであったこの領域が、最も不十分であった。わずかに、水野欽司、千野直仁両氏と共同で、潜在プロフィル分析の計算手法について検討したにとどまった。応用的な面では、研究生榎本阿津子と共同で、離